

「死の谷」を越える

石津 進也

旭硝子株式会社
代表取締役社長



基礎研究に成功しても、最終製品に結びつくことなく技術が埋もれてしまうことを、最近では「死の谷 (Valley of Death) を越えられない」と表現する。

もともと米国でこの言葉が意味するところは、研究開発が実用化段階に差しかかるとともに多額の投資が必要になり、これが賄えないために機会の喪失を招いていることを指すのだという。しかし、日本の「死の谷」は資金不足というよりも、市場創造の道筋を描く能力や技術経営能力、社外との連携の不足などに起因するということが最近の三菱総合研究所のレポートに述べられている。企業の経営者として、深く考えさせられる問題である。

投資判断の過誤には、2種類ある。ひとつは、儲からない事業に投資をしてしまう過誤。バブル期には企業も家計もしばしばこの過誤に陥り、現在の国全体のバランスシート不況を招いた。もうひとつは、儲かる事業なのに投資を見送ってしまう過誤。死の谷論は、技術開発が後者の過誤に陥るプロセスを端的に表現するために生まれてきたのである。

さて、産業技術総合研究所は実に多岐にわたる技術分野で、基礎・応用研究を進めている。もちろん、知的基盤整備事業もあろうし、産業化を目指す研究テーマでも、目途が得られるものは限られよう。しかし、成算の見込める個々のテーマがどのように死の谷を越えるべきか、公共性の高い機関であるが故に、幅広い論議を経た意思決定が可能ではないかと思う。企業との最適な形態によるアライアンス、ライセンス、産総研開発ベンチャーなど、これからは選択肢も多様になろう。是非とも意表を突くような谷越えルートを開拓し、成果をアピールしていただきたい。

公的研究機関のトップランナーとして、研究成果の社会還元産総研の果たすべき役割は大きい。近い将来に、産総研開発の「死の谷克服論」が熱く語られることを願ってやまない。